

## 創発と生命概念

沖 永 宜 司

生命の特徴には一見、物理的性質には見出せないものや、その性質に反すると思われるものがある。これらはいずれ物理的性質に還元されるのか。それとも反すると思われるものは、新たに創り出されたのか。前者は物理主義であり、後者が創発説 emergence theory である。ここでは物理主義と存在二元論との中間的形態として、創発説を位置づける。そして創発からすると、物理的世界における生命が、存在全体に対してどのような意義を持つかを考察する。それは、「無」から存在や法則が創発するという考えへの、原理的な考察と反省である。

### 一 生物は物理的状態「 $\alpha$ 」か？

生物を物理的状態から区別する古典的思想として物心二元論は有名だが、一八世紀から二〇世紀においても、自然科学の分野で、生命を支配する独特の法則を見出そうとする立場はあつ

た。しかもそれは、靈魂のような非物質的な概念によらず、自然科学の対象となりながら物理法則とは異なる法則を見出そうとするものだった。多くの生物学者が見出そうとした生氣に関する法則は、その代表例である。

またベルクソンの「生命の跳躍」も、物理法則ではない何かの法則と見なされることがある。生物の進化は自然選択によると、ダーウィニズム以降考えられているが、たとえば脊椎動物の眼と軟体動物の眼は、眼の形成以前の段階で進化系統上では分化しているのに、両者の網膜、角膜、水晶体の構造は同じで、他の無脊椎動物にはない独特の網膜反転があることまで共通する。そこで、同じ高度な形態的特性を持つ眼の進化が、互いに独立した進化系統に属す両者でなぜ同じように生じたのか。そこで進化を貫く生命独自の法則がベルクソンでは暗示された。<sup>(1)</sup>

このように、生物は物理的状態「 $\alpha$ 」だという立場が出て

きたのは、生命現象が物理的な決定論的、機械論的性質とは大きくかけ離れた見かけを持つからである。生命現象の $\alpha$ は生氣、意識、未知の性質などと考えられている。反対に $\alpha$ は存在せず、物理的性質以外に見える相貌は、単に現段階で説明できていない、つまり $\alpha$ は結局「無知」の産物だという立場もある。これは物理主義の立場であり、生物体は結局のところ原子の集積なのだから、その運動や法則も、原子のそれらを集積したもので以上ではない、という暗黙の了解がこの背後にある。

そこで創発説は、物質にはない見かけを「創発」と位置づけ、物理主義と「 $+\alpha$ 」の立場との調停を試みる。この立場は、本的には生命も物質から成ることを認めるが、世界を多層的に考える点でハードな意味での物理主義とは異なる。つまり創発説は、世界の基本的存在については物質に「依存」しながら、性質ではそこから「区別」される階層を、多様に認めるのである。ただし、原子のような下部階層から生命のような上層階層への因果だけでなく、上部階層からの「下方因果」を認めるか否かで、立場が異なる。それは、創発説があくまで下部階層を基本的な「存在」と見なすことで起こる問題である。

## 二 意識のハードプロブレムと創発

意識のないところに意識が生じたのはどうしてか。これがハードプロブレムの基本的問いである。それは、客観的世界からなぜ主観性が生じたか、という問いと表裏をなしている。創発

説は、この両者の接合不可能性から要求されてくる。

反対に、物理主義ではこの接合不可能性は存在しない。この立場は、意識法則をいずれば物理法則に還元可能と見なし、主観性や現象の特性は本質的には存在しないと見なすからである。つまり創発は現時点での説明上の方便と見なされるが、すると反対に創発説はこの説合不可能性を将来も続くと見なしていることになる。ただ、両者とも物質を「存在」上の下部階層に見ている点では共通する<sup>(2)</sup>。

まったく逆に、客観的な物理的状态を下部階層とせず、主観的現象的性質をもすでに下部階層に含ませようとするものに、情報状態としての「意識」の遍在を見るD・チャルマーズなどの立場がある。これは下部階層を物理的「情報」と見る限りで「物理主義」ではあるが、すでに「意識」化された物理主義とも言える。この立場では、物質と意識との間に根本的な断絶が設けられないため、本質的な「創発」は必要ない。したがって生命システムに関して、「意識」のない物質を基本とする物理主義と同様、「あるシステムはより多くまたはより少なく生きている」<sup>(3)</sup>という違いしか認めないが、方向だけは真逆なのである。基本的実在をすべて生命と見なしても物質と見なしても、右記の命題は変わらないからである。

なぜこの「意識」遍在の見解は一見奇妙なのか。それはこの立場が、物質と意識との違いを、対象の持つ断絶ではなく概念上の断絶と見なし、その概念の枠組みを作り変えようとしている

るからである。反対に創発とは、この概念的区別を成立させたまま、一方の概念の事柄から他方の概念の事柄への飛躍を認める立場である。またこうした概念的区別を、たとえばK・ポパーは世界1、2、3の区別として示し、T・ネーゲルは一人称と三人称との区別として示す。そしてこれらの区別を強固なものとして認め、この区別の消去は認めない。確かに意識を一人称、物質を三人称と言いつ換えると、物心の区別は経験的な問題から論理的問題となる。そしてベルクソンの「跳躍」を、物質ではない「 $\pm\alpha$ 」の別存在と見なす見解は、世界を区別する概念枠を認めたまま、「跳躍」を区別された世界の一方にあてはめようとするものである。

こうした見解は、世界を区別する枠組みがなぜ存在しているのか、そして今後の宇宙の進化においても、この区別は不変なのか、という疑問を呼び起こす。ここで、三人称的組織(物質)と一人称的組織者(主体)とを別概念に分けない「視点」の妥当性が考えられてくる。たとえば西田に、意識現象における「統一的或物」という考えがある。そこでは意識現象のほかに、それを統一する付加物があるのではない。客観的に意識現象を考察して初めて「統一者」が「統一作用」とは区別されるのであって、この客観的考察がなければ、「統一者」は「統一作用」から独立してあり得ない。しかし「統一者」は存在論的に無いのではなく、客観的考察から一度離れてみれば、ありありとここに認められ、統一作用自身とひとつにある。つまり、客観的

考察というあり方が、区別なきものに区別を設けていたことになる。さらに「場所」とは統一者、被統一者という区別を超えた無限定の次元であり、そこでは物理的宇宙 $\pm\alpha$ としての「意識」、主観対客観という構図は解体される。

このような物心、主客の無限定を、宇宙の進化の方向へ展開したものに、S・アレクサンダー(一八五九—一九三八)の考察がある。彼の特徴は、「神」という二元的実在を規定しつつも、そこから宇宙の様々な相貌が生じるところに、新しさとしての「創発」を見ようとするところにある。これは西田が「実在の分化発展」を唱えつつも、それを本質的な意味での創発とは考えなかったのとは対照的である。

神は神性の質を所持するものとしての世界の全体である。そうした存在においては、世界の全体は「身体」であり、神性は「心」である。<sup>4)</sup>

ここでは「身体」(物質)とは別に「神性」(心)があるのではなく、両者はともに神を構成するその不可分な側面であることが明記される。「<sup>5)</sup>そうして神の身体は宇宙の全体であり、その外部に身体はない」。しかも、始原より全能なる「神性」が司るのではなく、最初は「有限なる神」がそれ自身において神性を創発させたとする点が、アレクサンダーが創発論者たるゆえんなのである。そこで物質と潜在的な「心」とは、有限なる「神」を構成する不可分な側面として、意識を創発してきた。

これは、最初のひと押しを全能な神が行い、あとは決定論的

に目的へと展開する宇宙とは大きく異なる。この決定論的宇宙は物質的宇宙でよい。しかし、意識を創発する宇宙は「物質」と「心」とが不可分であるがゆえ、最初の「神」でさえ将来の展開を把握し得ない。そこに最初の「神」の有限性と、その後の宇宙の展開での純粋な創発が主張されることになる。全能なる神であれば、将来をすべて決定するゆえに純粋な創発はあり得ず、創発に見える現象も、見る側の無知によるものでしかないことになる。

さらに、「有限な神」としての宇宙自身が創発し続けるならば、それに伴う現時点での「意識」は創発の最終段階とは言えない。つまり、将来の創発の段階で、現在の「意識」とは似つかない何かが生じてくる可能性は否定できない。創発する宇宙の心的側面は、単純な志向性から、人間の意識へと進んできた。すると人間の意識はその延長として何になるのかが問題化する。ここで、意識とは現時点での私たちの概念枠に限定されたものに過ぎず、意識はこの概念枠によって狭隘に考えられている可能性が露になる。チャルマーズが遍在する意識を言い表す「現象的側面」は、現時点での意識をモデルとして様々な意識の姿を類推しているに過ぎず、将来に意識から創発されるものが、その「現象的側面」に収まるのかは推し量りがない。

これとは反対に、起源についても、創発説は問題を投げかける。創発説でも、物質を基本的な「存在」と見なす立場は、創発される性質は多様に展開するが、基本的「存在」だけは、た

とえば原子のように不変と見なす。すると、その基本的「存在」だけは創発されないことになり、自らの説に矛盾を生み出す。そして同時に、その「存在」はどこから来たかという謎を残す。また全能で、宇宙に最初の一押しをする神は、その全能性ゆえに神自身の起源が問われることを拒絶する。しかし信仰のない立場からは、神自身の起源は問わなくてよいのか、という疑問も残るだろう。これは起源に関する合理的探求でさえ、究極的に神への信仰に譲るしかないのか、という問題につながる。

しかし、アレクサンダーのような、有限でかつ宇宙内に創発を行う神は、始原において神自身も創発されることを許し、かつその後の宇宙にも、本質的に神の能力を超える創発があり得る。これは、宇宙に絶対的存在がない点で、物質を基本的「存在」とする立場や神の全能説と区別されるが、宇宙内にも、最初の神にさえも創発を認める点で、創発説としては首尾一貫している。そして宇宙の起源の問題を考察する上でも、信仰に全面的に道を譲る場合とは異なった示唆に富んでいる。次に、この創発と宇宙の起源の問題について考察する。

### 三 存在の創発

一般に知の構造には、知の「根拠」がそれ以上問われない地点がある。この問われない地点の一例として、たとえば自然選択に基づく進化論では、現存する環境に適応し得た生物種が生き残るという説明はなされても、なぜ現存するのはこの特定の

種であって、別の生き残り得た生物種ではなかったのか、という自らの根拠に疑問を投げげる問いはなされない。脊椎動物と軟体動物の眼の構造はなぜ同じか、という先の問いもそこにあたる。同様に、ニュートン力学から導かれる決定論的な法則は、その法則内部で記述される現象については、それが将来どのような展開するかを予測するが、この決定論は、なぜ自らがこのような決定論として登場したかを、自らの内部で説明しない。同じく、宇宙が創発する地点以後を説明する法則によつては、この創発の理由は説明されない。このように創発とは、一定の法則の根拠が底をつく地点に見出されている。

ホワイトヘッドは実在の全体からの、そうした法則自体の生成に着目し、この生成を支配するものを「限定の原理」と呼ぶ。この原理は法則の根拠であるため、一度成立したその法則を通しては捉えられず、実在に一段近いところにあると言える。それでも次に、この「限定の原理」の根拠は何か、という問いも生じ得るだろう。それを追求すると、「そのために何の理由も与えられることのできない限定」に至る。ホワイトヘッドはそれを「永遠的客体」として、その「究極の非合理」を容認する。ここで、出来事は必ず原因や根拠を有するという因果的、合理的思考が、それらを追求するがゆえに根本的に自己矛盾を露呈してしまう地点に行き着くことになる。

たとえば現代の物理学の理念についても、「その仕事は、物理法則を決める究極の原理を見つけるまで終わることがありま

せん。」<sup>(8)</sup>と言われる。しかしこの文言の筆者は同書のまったく別の箇所で、「しかし科学の世界では、一つの謎が解けると同時に、次の新しい謎が出現します。」とも主張する。二つを合わせれば、科学的探究は法則の起源を追求するがゆえに、新たな謎を生み出すという、根本的な自己矛盾を抱えることとなる。この矛盾構造は、宇宙自身よりも、宇宙についての知の性質に属している。ここでも、謎は私たちの概念枠が尽きるところに現れ、それは創発の性質と類似することが見て取れる。

創発論者P・デイビスの言う「無料の昼食 (free lunch)」<sup>(10)</sup>は、宇宙の発生に原因のない地点を認める。それは、宇宙が生じるところでは、私たちの「因果の原理」という根本的な概念枠が尽きることを否定しない。「無から存在が生じた」のは、存在の創発であり、それは大きな謎である。しかしそれは、因果の成立する「存在」つまり「枠内の視点」を、因果の成立しない枠外に対してもあてはめた結果、「無」という謎が作られたとも言える。創発は、一定の概念枠で説明のつく現象が、その枠外と接する地点に見出された。そしてこの因果の概念枠自体の「原因」を、宇宙の始原以前に求めるのは、「宇宙の始原」という概念がすでに因果の概念枠内にある限り、自己撞着である。むしろデイビスの考えからは、創発説を徹底すれば、因果的決定論の世界から自発的生命などが創発するのではなく、決定論の世界自体が創発の一段階に過ぎない、ということになる。し

実在を限定する法則には、その根拠の無さが考えられた。し

しかし、その「無さ」を考える形式もその考え自身には必要であり、そしてこの形式にも根拠がないことが明らかになる。これにより、限定するものの「根拠無さ」自体の根拠がないことになり、そうして根拠の有無という区別が無効になる。ホワイトヘッドは「限定の原理」を「神」と呼ぶ。しかし根拠としての「神」ではなく、この有無の根拠さえも絶した中立的状態こそが、「神」を立てずにたどり着き得る、「根拠無さ」自体の解消だと考えられる。存在は、無からいかにして生じたかという謎を惹起させるが、存在の無根拠さえも解消されれば、無を存在から区別する形式の根拠もなくなるからである。存在と無というのは概念的区別であり、この区別の根拠がなくなつたとき、無から存在が創発した謎は、回答が与えられるのではなく、問いとして無効になる。そしてそれが答えなのである。

ベルクソンは、始原の問題は「我々が、宇宙の生成はたつた一度で行われたと望む」「先入観」から生じると言う。この「先入観」を形作る概念枠に則ると、存在は「物質」や「因果」の枠によって一元化され、この枠は、「宇宙は作られたのではなく、絶え間なく自らを作る」という言葉の真意を理解不能にさせる。しかし反対に、この「因果」的一元化の方から根拠が剥奪されるとき、存在は無限定の姿で露になり、境界や始原も自らの根拠を失う。そこからすると、因果的決定論や、「一度」に行われる「宇宙の生成」の方が、「先入観」となるのである。

- (1) Bergson, H., *L'Évolution Créatrice*, Paris: Félix Alcan, 1908, p.70. ベルクソンの「生命の跳躍」は「正確には物理的状态「 $\alpha$ 」とは言えない。 $\alpha$ は物理的実在を前提として、そこに含まれない何かだが、「跳躍」からすれば、物理的状态も「跳躍」が弛緩したものに過ぎないからである。実際彼は、進化の原因について、自然選択でも個体の意志的努力でもない「もっと優れて深遠な何か」(ibid., p.185)が担っていると言う。ここからすれば、「物質」とか「精神」という概念化以前の何かとして「跳躍」は位置づけられる。
- (2) クリストフ・マラテール『生命起源論の科学哲学』みすず書房 二〇一三年は、創発に関する近年の代表的な研究成果のひとつだが、それは「実用主義的創発」という概念を批判することで、知識の増大とともに創発が消去されることを慎重に導き出している。
- (3) 同書、三三七頁。しかしChalmersが二側面的であるのに対して、Malarmeには現象的側面という問題意識はない。したがって、意識が創発した理由を最初から回避することもある。
- (4) Alexander, S., *Space, Time and Deity vol. II*, in: *Collected Works of Samuel Alexander* vol.5, London: Macmillan and CO, Limited, 1927, p.353.
- (5) *Ibid.*, p.357.
- (6) Whitehead, A., *Science and the Modern World*, New York: The Free Press, 1967, p.178.
- (7) *Ibid.*, p.174.
- (8) 佐藤勝彦「宇宙は無数にあるのか」集英社、二〇一三年、二〇三頁。
- (9) 同書、四九頁。この二つの主張は、互いの矛盾を自覚的に書いてあるとは読めない。
- (10) Davies, P., *God & the New Physics*, New York: Simon & Schuster Paperbacks, 1983, pp.214-17.
- (11) Bergson, J., *Evolution Créatrice*, p.261.
- (12) *Ibid.*, p.262.

(おきなが・たかし、哲学・宗教学、帝京大学教授)